
(3) 放卵量の調査

(井戸本純一)

目 的

1 個体あたりの放卵量を把握することは、セタシジミの再生産力を推定するうえで重要であり、また種苗生産にあたっても必要不可欠な基礎資料となる。そこで、昨年度に引き続き、大きさの異った個体から採卵し、放卵数の計数を行った。

方 法

大きさの異なる個体を、それぞれ湖水の入った1ℓビーカーに収容し、24℃に加温したウォーターバスに入れて産卵を促した。卵の計数は、水量を1ℓに調整したのち、卵をよく攪拌して1mlの水とともに抽出し、実体顕微鏡下で行った。4回の計数の平均値から、1ℓ中の卵数を算出した。

結果および考察

殻長15.3mmの1個体のみが放卵した。放卵数は107,000であり、開殻して観察した結果、卵巣内に卵はほとんど残っていなかった。

琵琶湖生物資源調査団報告⁵⁾(以下B.S.T.)では、殻長16~18mmの個体の抱卵数は35,000と報告されているが、今回の放卵量はその値を大幅に上回っていた。昨年度の調査においても、B.S.T.の報告では殻長24~28mmで120,000~130,000の抱卵数であるのに対して、放卵数は殻長24.6mmと27.7mmの2個体で465,000、1個体あたり平均233,000と大幅に上回っており、今回の結果とあわせて、B.S.T.の抱卵数が実際の放卵数よりもかなり少ないことが指摘される。セタシジミでは、生殖腺の構造上、正確な抱卵数を計数するのが困難であり、また成熟度も個体によってばらつきが大きいことから²⁾、再生産力を推定するには、実際の放卵数を計数するほうがより現実的であると思われる。したがって、今後も放卵数の調査を継続し、セタシジミの殻長と放卵数との関係を把握する必要がある。